

# 「屋久島は月のうち、35日は雨」

これは、昭和初期の放浪作家・林芙美子の名作「浮雲」の中で、ヒロインが愛の逃避行の果てにたどり着いた屋久島に評された言葉。

今、私はいつもの「浜松の街」を離れこの屋久島へ…逃避行ならぬ待ちに待っていた夏休みの旅行に来ています。小型プロペラ機でたどり着いた私の屋久島は、浮雲のイメージとは正反対に、見事な紺碧の海と空！

今回、世界遺産マニアの私の目的は、屋久杉のキング「縄文杉」に会いに行くこと！果てしなく続くと思われるトレッキングは、全行程22キロ。スタンドバイミーさながらトロッコ道の線路の枕木を17キロ踏み続け、森の中を5キロのアップダウン。トレッキング初心者の私にはなかなか過酷ながら、もののけ姫の舞台となったこの深く蒼い森は清々しいという言葉を通り越して神秘が、そしてゴールに聳える縄文杉の偉容には言葉を失うほどの感動がありました。

今日、この長い山道を歩きながら似つかわしくないような言葉「スティモラーレ(イタリア語で刺激するという意味)」がひたすらに浮かんでいた私。

何年も前に読んだ「おとな二人の午後」という作家・塩野七海と五木寛之のイタリアを語った対談集の中の一節に、塩野さんがイタリア人、特に大人がこのスティモラーレの感覚を大切にしている、といった内容だったのですが、イタリア人は日常の当たり前前の生活の中で、食べるのも、恋をするのも、オペラを観に行くのも、ファッションにこだわるのも…たえず感性を刺激・鼓舞して、自分を鈍らせてしまわないようにしているのだそうです。今日、山ガールファッションの私は、深い森の中で巨大なおにぎりをほおぼりながら、大自然に大いに刺激され、感性をゆすぶられてきました。

話は変わりますが、先日仲間と共に「大人のプロムパーティ」を開きました。会場は、オープンしたての田町のポルテポヌール。浜松の街ではなかなか大人がオシャレをして遊ぶ機会がない、きちんと人と交流する機会がない、との話を聞いての開催…よし、それなら私たちで機会を作っちゃおう！と。

当日、パーティの蓋を開けてみれば、ブルーノート風の会場には160人超のオシャレをした素敵な大人たちでいっぱい！今回のテーマのアメリカの高校生のプロムさながら、ディスコにライブにおしゃべりに…無邪気に笑い楽しんで、ゲストの方々が少しでもこのスティモラーレを受けて、日常を・浜松の街を楽しい！と思ってくださっていたのではないかと、と思っています。

時には、すすんで街で着飾って遊ぶのも、森の中で自然に触れるのも…刺激を受けて、感性を磨いて自分を豊かにしていく体験には変わりありません。イタリア人と同様、日本の大人には大切なのではないかと、と思っています。

あと数日で、また私は浜松の街というコンクリートジャングル(笑)に戻ります。この秋は、この街でどんな楽しい・感性が揺さぶられる出来事があるのでしょうか。そして今はオーバーゼアのツノガイさんとのパーティを企画中…私自身もワクワクしています♪皆さまもお楽しみに！



肴町のレディースブティック「Sun Marry」オーナー。Sun Marryは、お客様は3歳から100歳、取扱いブランドは50以上という幅広いバリエーションを持つセレクトブティック。最近では自ら企画したガールズハット「ブティマリー」を全国に向けて通販展開している。おしゃれのお手伝いで、関わるすべての女性をより素敵にして、最高の笑顔を引き出したい!と日々奮闘中。



佐々木まり子